

## 論 文

# サンティアゴのポブラシオンにおける言語

高 橋 節 子

## I. 序

本稿の目的は、チリの首都サンティアゴを中心とする地域の下層民のことばを記述することにある。具体的には、ポブラシオンに住む住民自身の手になる演劇のシナリオをもとに、ポブラシオンのスペイン語の特徴を見ていくことにする。主に用いた資料は、Muñoz, et. al. 1987に記載されている長短あわせて22編の演劇である。劇のシナリオをとうしてことばを見るのは、音声直接観察するのではなく、その音声的特徴がどのように文字に反映されているかに焦点を当てることになる。文字という二次的要素は当然音声という一次要素に支えられているわけで、この音声的特徴に関しては Oroz, 1966 が非常に参考になった。

## II. サンティアゴのポブラシオンにおける演劇活動

1. ポブラシオンとは都市周辺部にひろがる低所得者層の住宅地をさしている。Muñoz によると、サンティアゴの全人口400万の約250万 人が400 近いポブラシオンに住んでいるという。1973年に起きた軍事クーデター以降、ピノチェト軍事政権は経済的には自由解放政策を採用したために、多数の工場が倒産し、失業者が増え、ポブラシオン住民の生活を圧迫した<sup>1)</sup>。演劇の中

でも失業問題は重要なテーマとして頻繁に登場し、それから派生する飢え、家庭内不和、栄養失調、アルコール中毒、麻薬、劣悪な住環境といった問題が扱われている。また、軍政下で抑圧されてきた人権問題、あるいは人間性の回復といったテーマも主要なモチーフとなっている。

2. まず、ポブラシオンにおける演劇活動に関して簡単に言及しておこう。ポブラシオン演劇は1970年代後半に始まった様々な文化活動の中の一つであり、その担い手は学生、失業者、労働者、主婦といった人々である。演劇活動の目的は自分たちが属しているコミュニティの現状や問題点を正確に提示し、そうした日常生活を描くことを通じて、彼ら自身が社会変革の主体であることの自覚を促し、また組織化を図ることにある。

例えば“taller Granaje”というポブラシオン Lo Hermida で発足した劇団は、結成の目的を次のように言っている。「1）ポブラシオンの現実を見せることで現状に対する‘意識化’を図ること、2）理論と実践面での知識を深め、民衆演劇研究におけるセンターとしてモニターを養成すること (ibid. : 419) 」

Muñoz のことばを借りれば、ポブラシオン演劇の意義は、「軍政のもと、国家との対話の可能性をとざされた中での文化的実践にある (ibid.: 37) 」といえるだろう。

ポブラシオン劇の特徴は、それがポブラシオン住民自身の手によって作成—消化されるものだということの他に、作成方法自体の中にも求められる<sup>2)</sup>。ポブラシオン劇の作成方法は *investigación-montaje* と呼ばれるが、これはまず、劇団員自身の体験や周囲の人の体験からデータを収集することから始まる。次にデータから核となるテーマを選び、ストーリーを組み立て、それを劇化し、さらに即興劇にまでもっていくわけだが、これらすべての過程を通じて共同制作の原則が貫かれ、グループ内での検討を通じて制作が進められていく。さらに上演の際には、公開討論、インタビュー、公開劇等を通じて観客との対話が図られる。特に公開劇では観客の側から劇を変更することが

でき、その場合の観客は単なる客体であることをやめて、劇に介入する行為の主体に転化することになる。<sup>3)</sup>

### Ⅲ. ポブラシオンのスペイン語

本稿の目的がポブラシオンの住民自身の手になる劇をもとに、チリ中部方言を探ることにあることはすでに述べた。直接音声ではなく書かれた資料に基づく分析であるが、これは筆者の関心が以下の二つにあるからである。一つは、標準スペイン語とは異なる“ことば(habla)”を話す話者が、正書法をもたない自分のことばをいかに表わすかを見るためであり、もう一つは、ポブラシオンの住民には非識字者がかなりいるといわれているが、こうした成人の非識字者が文字を獲得する際に経験するであろう困難を多少なりとも予測してみたいからである。彼らは単に文字を習得するというだけではなく、自分たちが日常使っていることばとは異なる規範に従った標準スペイン語の正書法を習うわけであり、いわば二重の困難に直面していると考えられるからである。ただ、こうした成人識字教育に関する諸問題は本稿の直接の関心事ではないので、機会をあらためて述べたいと思う。

Oroz (op. cit. : 46) はチリの方言を四つに分類している。北部、中部、南部、それにチロエ島である。さらにチリでは地域差だけではなく、社会的階層差（上流、中流、下層）も顕著である。従って以下で扱うサンティアゴにおけるポブラシオンのスペイン語は、中部方言の下層階級の話すインフォーマルなスペイン語ということになる。

#### 1. voseo について

チリのスペイン語が標準スペイン語と体系的に異なっているのは、主語人称の代名詞 vos, 及びそれが支配する動詞の活用形である。この現象は voseo と呼ばれ、チリ以外の南米各地にもみられる。

標準スペイン語における親称 2 人称は tú であるが、voseo における親称 2

人称は vos である。これは語源的には 2 人称複数を表わす語であり、現に今でもスペインでは vosotros という語形となって用いられている。南米には vos が親称の 2 人称単数として用いられている地域がかなりあるが、その用いられ方は地域によってかなり様々である。アルゼンチンのように国民の全ての層に渡って用いられている地域もあれば、一般大衆のみが使用する地域、チリ、ボリビア、コロンビアのように tú と vos が競合して用いられている地域などがある。

また vos が支配する動詞の活用形にもいくつかのバリエーションがみられる。アルゼンチン、チリのように 2 人称複数形に由来する活用形を持つものがある一方で、2 人称単数形 tú と同じ活用をする地域もある。そして 2 人称複数形に由来する活用をするチリとアルゼンチンにおいてもその活用の仕方が異なる等、voseo をめぐる状況はきわめて複雑である。

## 2. チリの voseo

チリの voseo の規則活用は、若干の例外的なバリエーションを除けば以下の通りである (ibid.: 306)。なお完了時制は省いてある。

直説法現在	接続法現在
vos cantái(s)	vos cantí(s)
vos comí(s)	vos comái(s)
vos viví(s)	vos vivái(s)
直説法過去	接続法過去
vos cantábai(s)	vos cantarái(s)
vos comíai(s)	vos comierái(s)
vos vivíai(s)	vos vivierái(s)
直説法未来	直説法過去未来
vos cantarí(s)	vos cantaríai(s)
vos comerí(s)	vos comeríai(s)

vos viviri(s)

vos viviríai(s)

語尾の -s がカッコでくくってあるのは、音節末では -s が氣息音化するからであり、これは大衆レベルではしばしば脱落する (ibid. : 101, Kany, 1951 : 68)。

チリでは vos を用いるのは専ら一般大衆に限られ、上流、中流階級の間では tú のみが用いられる。また vos を使う人も同時に tú も用いるため、tú と vos が混同して誤った活用形を選択することがしばしばある。

### 3. 資料に現れた voseo

(1) ポブラシオン演劇の登場人物は、そのほとんどがポブラシオンの住民であることから、vos は非常に頻繁に現われる。また同様に tú も用いられ、同一人物が同じ相手に対して vos を使ったり tu を使ったり、自由に交替している。Muñoz, op. cit. : 178—179<sup>5)</sup>から例を上げてみよう。

ずっと家を留守にしていた Beto が妻 Chela の前に姿を見せる場面である。

Chela … ¡Apareciste<sup>6)</sup>, vago ! Te acordaste que ① tenías casa !

(現れたね。あんたにも家があるって思いだしたわけか)

Chela … ¡Hola, hola !, ¿ Es que no ② sabís decir ni hola siquiera, bicharraco?

(やあ、やあ。それとも挨拶もできないっての)

Beto … Ah, sí … yo …

Chela … No, no. Quédate ahí no más, ya no necesito tus salúos ; tampoco

③ digas na si quieres.

(いいよ。いいよ。挨拶なんていらないよ。それに言いたくても何にもいわないでよ。)

⋮

Chela …¿Es que la ④ conoces ? No te le ⑤ habrai lanzao po, esa chica es  
bien decente y no se va meter con un desgraciao como ⑥ tú ...

(じゃ彼女知ってるの。ちょっかいたしたんじゃないだろうね。あの子  
はまじめで、あんたみたいなろくでなしを相手にする子じゃないんだ  
よ. . )

Chela は Beto に対して①では tú を、②では vos を、③では tú を用い、  
その後しばらく tú ではなしを続けた後、④で tú、⑤で vos、そして⑥で再  
び tú を使っている。スペイン語では 1, 2 人称の主語は省略されるのが普  
通なので、tú と vos の交替といっても上の例の場合には主語によるのではな  
く、動詞の活用形でそれと分かるわけである。

ただし、主語が明示され明らかに混同されている例もしばしば見い出され  
る。

¡ Tú sabí de sobra que no me gusta pedir limosna ! (199)

tú decís que no estás de acuerdo con regalar una máquina de escribir (219)

¡ Tú parece que tenis toos los días desocupados ! (225)

¿ Y tú creís que con eso vai a sacar algo ? (297)

¿ Y tú tenis la verdad ? (311)

¡ Soi raro tú, loco ah ! (313)

Así que no podís decir tú ... (327)

¿ Acaso tú te vestih, comih, cagai ? (388)

tú estai de acuerdo, (220)

si tú te llamai Soto González, (313)

vos と tú の混同と言っても上例からも分かるように、「tú + vos の活用形」  
という組合が圧倒的で、その反対の「vos + tú の活用形」という混同の仕  
方はほとんどない。また vos の活用形のなかでも -i(s) (er · ir 動詞) が多く、  
-ai(s) (ar 動詞) とともに用いられた例は少ない。Oroz (op. cit. : 307) も tú  
は -ais とは用いられない、と述べている。

Kany (op. cit. : 68) は vis (ver の vos の活用形) は *tú* と組むより vos と組んだ方がより卑俗 (vulgar) な感じがするといっているが、これは上述の *tú* と vos のアンバランスの一つの説明となるであろう。また、vos は怒りを感じた時に用いられる、という指摘 (堀田, 1976 : 52)<sup>7)</sup> も説明の一助となるであろう。つまり「vos + vos の活用形」という組合の主語の部分を *tú* で置き換えることで、卑俗な感じを薄めることができるのである。

(2) Kany と Oroz の活用形を比べると目だって違う点が二つある。一つは語尾の s に関するもので、もう一つはアクセントに関する点である。

Oroz が語尾の s をすべてカッコでくくっている一方で、Kany は *tomái(s)*, *tomábai(s)*, *tomárai(s)* と語尾の母音が -ai- と二重母音になっている箇所では s がカッコでくくられ、*-is* で終わる箇所では s にカッコがついていない。Kany (op. cit. : 68) の説明によると、「語尾の s は通常は氣息音か、あるいはまったく発音されず、実際のこの活用は -ai, -ay になる。しかしながら *-is* で終わる場合は、強勢のある前舌高母音の *i* の影響で氣息音がはっきり聞こえる。この形式は s で書かれるがまれには h のこともある」。

劇に現われた vos の活用形を見てみると、-ais で終わる活用形の場合は語尾の -s が書かれたものは一例もなく、すべて -ai と書かれている。(ただ -ay となっているものが数例見られた : *estay*, *cachay*, *te hay fijao*)。一方で -is を語尾にもつ活用形の方は、-s が落ちた形と同様に -s を保った形もよく現われる<sup>8)</sup>。語尾の -s に関しては、-ais の場合と -is の場合とでその扱いに違いがあることが分かる。

vos の活用語尾から語尾の -s がしばしば消えてしまうということは、他の活用形との混同を引き起こす危険性があることを意味している。

まず *ser* 動詞の現在 1 人称 *soy* と vos の *soi*<sup>9)</sup> (時に *soy* と *y* で書かれることもある) である。英語の *be* 動詞にあたる *ser* の 1 人称と親称の 2 人称がまったく同じ発音という事態が起きてしまうのである。また、*er*, *ir* 動詞においては、vos の直説法現在と完了過去の 1 人称単数形とがまったく同形にな

ってしまう (creí, aprendí, entendí etc.)。

(3) Oroz 及び Kany の活用表では、-ai(s) で終わる形式の全てに次のようなアクセント符号をつけている<sup>10)</sup>。

Kany : tomái(s), comái(s), tomábai(s), tomárai(s).

Oroz : cantái(s), cantábai(s), cantárai(s).

しかし、正書法に従えば現在形 (tomái(s), comái(s), cantái(s)) にはアクセント符号が必要だが、過去形 (tomábai(s), tomárai(s), cantábai(s), cantárai(s)) には不要である。わざわざつけてあるのは強勢の位置を明確に示したいためかとも想像される。

ところが資料を見ると、-ai(s) で終わる動詞の中で（ただし comíai, cantaríai のように -íai- を含む活用は除く）アクセント符号がついているものはほとんどない（一例のみ : estái）。また語尾の -s も消失しているので資料に現われた活用形は次のようになる。

直説法現在 : estai, gritai, tomai, esperai, sacai, llamai, cachai, etc.

接続法現在 : pongai, seai, vayai, metai, salgai, etc.

直説法完了過去 : estabai, fumabai, ibai, etc.

接続法過去 : estudiarai, pudierai, etc.

実際は、現在形（直説法、接続法とも）では最後の音節に、過去形（直説法、接続法とも）では後ろから二番目の音節に強勢があるので、正書法に従えば現在形には当然アクセント符号が要求されるところである。もちろん voseo は規範文法の外にあるから、それを文字に転換しようとする際には正書法の規則から逸脱することもあるだろう。しかし動詞の語尾が -ai で終わる活用に限って言えば、アクセント符号がないという同じ条件のもとで、現在形の場合には最後の音節に、過去形の場合には後ろから二番目の音節に強勢があるというのは、明らかな矛盾である。

もう一つ綴りの問題も残っている。正書法によれば半母音 i は語の末尾においては y で記されねばならず、語尾の -ai は本来ならば -ay としなければ



ならないところである<sup>11)</sup>。-ay であれば子音字で終わる語は最後の音節に強勢を持つから、現在形におけるアクセントの問題は解決されることになる。ただそうすると今度は過去形の方にアクセント符号が必要になってくる。

結局この問題は、voseo という規範文法の枠外にあり正書法の制約をうけない現象を、文字に転化しようとする際の困難に帰することができる。そしてこれは以下に述べる音の脱落や変容に関しても共通した問題である。

#### 4. 音の脱落, 変容

(1) /b/は休止の後の語頭, 及び鼻音の後では閉鎖音であるが, それ以外の位置では摩擦音 [β] として実現する。摩擦音は特に母音間ではさらにたろみ, しばしば消失する。Oroz (Op. cit. : 96) は A. Alonso の言葉を引用して次のように述べている。「個人的な経験と観察によれば, 南米でもスペインでもチリの b ほどたろんで発音されるものはない。これはチリの発音の際立った特徴の一つである。」

この/b/のたろんだ発音はポブラシオンの書きことばのなかにもはっきりと見て取ることができる。

caallero (caballero) (196)<sup>12)</sup>, caeza (cabeza) (238).

もちろん動詞も例外ではない。

dee (debe) (237), traajaa (trabajaba) (243), sae (sabe) (254), saí (sabí) (254), ía (iba) (254), súen (suben) (243).

さらに文字 v も b と同様/b/と発音されるので v も脱落する。

llea (lleva) (238), vío (vivo) (239), túe (tuve) (247), juees (jueves) (258), todaía (todavía) (260).

発話の流れの中では隣接する音との関係で, 語頭の/b/も消失する可能性がある。

¿ Noí que aquí no hay plata ... ? (¿ No vis que aquí no hay plata ... ?) (241)

(2) スペイン語の有声閉鎖音/d/も同様な振舞いをする。/d/は/b/と同じように休止の後の語頭か、/n//l/の後では閉鎖音であるが、それ以外の位置では摩擦音[ð]になる。そして母音間、及び語末ではさらにたるみしばしば消失する (ibid. : 99-100)。

tenío (tenido) (164), tomaor (tomador) (169), desgraciao (desgraciado) (179), too (todo) (183), aentro (adentro) (237), ayúa (ayuda) (239), puee (puede) (243), naa (nada) (243), toaía (todavía) (245), mieo (miedo) (258); municipalidá (municipalidad) (164), malda(maldad) (179)

語尾が -ada で終わる語は d が失われることで同一母音が隣接し、その結果母音どうしの縮約がおこり、語尾の母音 -a までもが消失してしまうことがある。

abogā (abogada) (173), patās (patadas) (182), na (nada) (185), mermelā (mermelada) (238), enojā (enojada) (239), usā(usada) (240), desclasā (desclasada) (242), exagerā(exagerada) (258), huevā(huevada) (315)

ことに na は naa とともに頻繁に用いられている。

隣接音との関係では語頭の d も消失する。例えば前置詞 de は母音で終わる語の後でしばしば e で表される。

peazo e pan (pedazo de pan) (169)

debajo e su casa (debajo de su casa) (165)

na e pega (nada de pega) (167)

peazo e cochino (pedazo de cochino) (182)

un plato e comía (un plato de comida) (182)

de 以外にも同様の条件下で語頭の d が脱落する。特に動詞 decir と dejar にこの傾向が顕著である。

No tengo na por qué ecir mi gracia po. (No tengo nada por qué decir mi gracia po) (245)

pero me icen Perlita (pero me dicen Perlita) (245)

Yo ecía lo mismo (Yo decía lo mismo) (250)

cuando uste no me ejó que hablara (cuando usted no me dejó que hablara)  
(241)

Mi ama me ejó venir (Mi ama me dejó venir) (254)

te ejé unos panes (te dejé unos panes) (254)

(3) 音節末の -s が氣息音化するのはラテンアメリカの諸地方において共通する現象である。チリでは、上層階級のことばにおいては半氣息音であり、民衆語においては完全な氣息音、ないしは無音である (ibid. : 101)。

音節末の -s は voseo の活用形のところでも問題になったように、-ais でおわる活用形においては完全に無音となり -ai と表記されている。他にも -s が脱落している例は数多い。

No e na como ante (No es nada como antes) (240)

Si nosotros no nacimo nunca oh, nosotros llegamo muerto del vientre de la vieja, (Si nosotros no nacimos nunca oh, nosotros llegamos muertos del vientre de la vieja) (242)

Ademá mientra meno coma más rápio me voy po. (además mientras menos coma más rápio me voy po.) (246)

また氣息音化している -s を文字 h で表わす場合もある。

noh hacimoh un sanguche (nos hacemos un sanguiche) (239)

Acaso tú te vestih, comih, (Acaso tú te vestís, comís) (388)

(4) bueno [bwe'no] における bue- が güeno と文字 güe- をもって綴られることがある。同様に huevo [we'βo] のように、半母音 [w] は完全な休止の後、もしくは母音間にくるときしばしば文字 g をもって表わされる (ibid. : 154, 164, Navarro Tomás, 1972 : 64)。

güeno (bueno) (167), güevá (huevo) (181), agüelo (abuelo) (170), agüela (abuela) (255), güena (buena) (223), güelo (vuelo) (240), güeco (hueco) (252), güelto (vuelto) (255), güeón (huevo) (196), güeaita (hue-

高橋節子

aíta < huevadita) (197),

Oroz は crema をつけた語しか紹介していないが, crema がない形でも現われる。

guevees (huevees) (179), gueones (huevones) (196), gueví(huevis < hueveís) (195),

また, アクセント符号をつけた gé として実現されることもある。その結果, 一つの単語が二つのアクセント符号を持つことさえある。

géeno (bueno) (166), agéelo (abuelo) (170), agéela (abuela) (170), géena (buena) (226), alcagéetería (alcahuetería) (166), géevā (huevada) (179)

güeno, gueno, géeno という動揺は gū, gu, gé で綴られる音の特殊性にあると考えられる。Oroz は「綴り gu- はこの発音を正確には反映していない。少なくとも常に閉鎖音とはいえないからである (ibid. : 154) 」としているし, Navarro Tomás (op. cit. : 64) はこの音を唇の丸めをともなった [ɣ] に似た音になる, としている。

こうした綴り字上の揺れも, 日常用いられる民衆語を文字化する際の工夫の現われと見ることができる。

(5) 教養ある人々は f を一般に唇歯音 [f] として発音するが, 一般民衆は両唇音 [Φ] として発音するのが普通である (Oroz, op. cit. : 98)。この両唇音は文字 j で表わされることがある。特に後ろに母音 u がくる時はほとんど j で綴られている。

juerza (fuerza) (244), jui(fui) (198), jue (fue) (249), juimos (fuimos) (244), jueron (fueron) (251), juera (fuera) (237),

文字 j は標準スペイン語では無声の軟口蓋摩擦音 [x] であるが, チリの民衆語では後続の母音が o, u (特に u) の時, 両唇音 [Φ] で実現される (ibid. : 124)。後続の母音が u の時 fu が ju で綴られるのはこのためである。

(6) 無強勢の e は休止の後、及び母音で終わる語の後では消失する傾向がある。例えば *está bien* は *stá bien* を経て *'ta bien* になる。*estar* の *es* が脱落するのは非常に頻繁に見られる現象である (ibid. : 59)。

¡ Tai más tonta ! ( ¡Estai más tonta ! ) (179)

Toy cansao (Estoy cansado) (202)

Usté ta loco (Usted está loco) (247)

¿ Con quién taba blando ? (¿Con quién estaba hablando ?) (248)

tará jugando (estará jugando) (251)

定冠詞 *el* も *e* が落ちて、*pal* (*para el*) *estudio* (173), *pal* (*para el*) *pan* (196) のようになるし、*entonces* も *en* が落ちて *tonces* (250) になる。

また無強勢の *e* と *i* は交替することもある。

*Eris* (*eres*) *my joven* (173), *aquí mesmito* (*aquí mismito*) (199), *ti* (*te*) *acordai* (230), *como si mi* (*me*) *importara* (239), *Noí que mi* (*me*) *bai a hablar* (239), *pior* (*peor*) (244)

## (7) 母音縮約

発話の際、言語音はいくつかのとぎれることのない音連続となって実現される。その一続きを Navarro Tomás は *grupo fónico* (呼吸段落) と呼んでいる。この音グループ内で同じ母音が隣接すると、通常その母音連続は一つの母音に収縮してしまう (Navarro Tomás, op. cit. : 152-154)。例えば *¡Qué está amable !* という発話は、*/kes'ta'ma'ble/* ( - は音節の切れ目を示す。) のように発音される。

ところが劇のシナリオにおいては、母音縮約がそのまま反映されて *¡Quésta mable !* (254) のように書き表わされることがある。こうした例は数多く見いだされる。その際、二つの語が一つにまとまったり、あるいは一つの語が二つに解体され、その一部が前の語と合体して一語のように綴られたりする。

*sae ques toy enamorá del ...* (*sabe que estoy enamorada del ...*) (237)

Má aburrío ques cuchar la copa Deivi (Más aburrido que escuchar la copa Deivi) (243)   mija (mi hija) (173),   después deso (después de eso) (244)

no labíamos arreglao (no la habíamos arreglado) (244)

¿ Ses ta castigando ? (¿ Se está castigando ?) (244)

podría ber empezao por ahí (podría haber empezado por ahí) (245)

Bien tirao a lan tigua el flaco (Bien tirado a la antigua el flaco) (245)

¿ A quén tonces ? (¿ A qué entonces ?) (250)

ya ses ta pareciendo a la Juana (ya se está pareciendo a la Juana) (257)

Non tiendo na'. (No entiendo nada) (260)

これもポブラシオンで話されていることばを正書法の枠を越えて、できるだけ忠実に文字で再現した結果である。

## 5. アクセント符号

正書法の観点からするとアクセント符号はかなり動揺している。vos の活用形に関してはすでに述べたので、ここではそれ以外の場合を取り挙げる。

ポブラシオンの中で発行されている手書きのパンフレット<sup>13)</sup> にはアクセントの動揺がはっきりと見て取れる。

特によく見られるのが, esdrújulo (最後から3番目の音節にアクセントがある語) にアクセント符号がついていない場合である。書き手によってほとんど一貫して抜かしている場合さえある。

economicos, autonomo, jovenes, vitaminico, maximo, plastico;  
pasandole, dandolo, ayudandonos, demostrandole, educandose;  
ibamos, intentabamos, pensabamos, trabajabamos,

その他 estar の現在形や, 弱勢語と対をなす語でアクセント符号が必要な語においてもよく忘れられる。esta, estan, este ; que, como, mas,

またその反対に本来なら必要のない語にアクセント符号がついている場合もよくある。よく用いられるのが ustées で, これは単数形の usted から語尾の d が落ち, その結果アクセント符号が必要となった usté に複数の語尾 es

がついてできたものである。

さらにアクセント符号はその本来の機能を失い、ある特殊な音を表わすために利用されることがある。さきに述べた(Ⅲ-4-(4)) *gé* の場合がそれで、これは唇の丸めを伴った有声軟口蓋摩擦音を表わしている。

## 6. アポストロフィ

スペイン語の正書法ではアポストロフィは用いられない。しかし、音の脱落が頻繁に起こるポブラシオンのスペイン語では、省略記号としてのアポストロフィが登場する。

一番多いのは前置詞 *pa* (*para*) とともに使われる場合で、資料全般にわたって見受けられる。これはまず語中の *r* が脱落し (*paa*)、さらに母音縮約が起きて *pa* となったものである (Oroz, op. cit. : 136)。

*pa'la comida* (*para la comida*) (189), *pa'otra vez* (*para otra vez*) (195), *pa'ca* (*para acá*) (196), *pa'echar* (*para echar*) (196), *pa'legar* (*para alegrar*) (235), *pa'cerme* (*para hacerme*) (242), *pa'ónde* (*para dónde*) (271), *pa'lla* (*para allá*) (290), *pa'rriba* (*para arriba*) (290)

前置詞 *de*、及び *de* と冠詞 *el* が融合した *del* も消失の印に前の語にアポストロフィをつけることがある。

*techo'e paja* (*techo de paja*) (377)

*cagao' el hambre y preocupao' el deporte* (*cagado del hambre y preocupado del deporte*) (164).

*el pobre manzano amaneció malo' el cuerpo* (*el pobre manzano amaneció malo del cuerpo*) (165),

*ándate a la punta 'el cerro* (*ándate a la punta del cerro*) (165).

そのほか *estar* の語頭部分が省略される場合にもよくアポストロフィが現われる。

*Por ahí'sta el viejo.* (*Por ahí está el viejo.*) (375)

*El mundo yas ta'echo así* (*el mundo ya está hecho así*) (264)

ahora'stamos bien (ahora estamos bein) (406)

もちろん省略されればかならずアポストロフィが用いられるわけではなく、書き手の自由裁量である。

usted nunca'bla de'llo (usted nunca habla de ello) (251)

Ahora lon'tiendo (Ahora lo entiendo) (263)

una pieza que bia sio almacén (una pieza que había sido almacén) (255)

ya bía nació la Emilia (ya había nacido la Emilia) (255)

(251) (263) ではアポストロフィが用いられているが、(255) の2例では用いられていない。

#### IV. 終わりに

チリのスペイン語は他のラテンアメリカ諸国とその特徴を共有していないことが多い。これはアンデス山脈とアタカマ砂漠という自然の障壁によって、隣接地域との接触が困難であるという地理的要因に負うところが大きい (Cotton, 1988: 221)。

その独自性は音のレベルだけではなく、voseoに見られるような形態のレベル、さらに最も豊かな語彙の分野へと広がっている<sup>14)</sup>。

本稿ではサンティアゴの下層階級のはなしことばを取り上げ、正書法の枠外にある民衆語がいかん文字に表わされているかという点に焦点を当ててきた。扱ったのは、音と文字の関係、voseo、そしてアクセントとアポストロフィという文字記号であり、文字に現われた、という制限つきではあったが、サンティアゴではなされている民衆語の独自性の一端を合間見ることができたと思う。

しかし、今回は文法と語彙の問題には言及できなかったし、voseo 以外の形態レベルでもユニークな現象が残されている。これらの問題点に関してはまた稿を改めて述べるつもりである。



## 註

- 1) 失業率は1978年に13.9%, さらに1980年には30%に悪化している。1980年にサンティアゴのボブラシオンでは57.8%が栄養の必要最低カロリーを摂取していない。極貧層では必要最低カロリーの約7割強しか摂取していない。(Muñoz, 1987: 24-25)
- 2) investigación-montaje と呼ばれる劇の作成方法に関しては, Muñoz, ibid. に収録の Olivari, J. L. Investigación-montaje en teatro poblacional: cuaderno de capacitación. 133-159 を参照。
- 3) ラテンアメリカの演劇に関しては里見, 1990を参照。
- 4) Cotton, 1988はチロエ方言を南部方言の下位区分にしている。
- 5) 以後資料となる劇から引用するときにはただページ数だけを記す。
- 6) 直説法完了過去においては vos の活用はaparecistesとなるが, 語尾の -s は消失するので tú の活用形と同形になってしまい, vos と tú の区別がつかなくなる。
- 7) 堀田は Eguiluz, L. 1962. Fórmulas de tratamiento en el español de Chile, *Boletín de Filología-Santiago de Chile*. 169-233を引用してこのように述べている。
- 8) 氣息音化した語尾の -s は文字 h で表わされることもある: sabih, entendih
- 9) soi と並んで so (< sos) という形も用いられている。Oroz, 1963: 318にはむしろ sos の方が優勢だという記述がある。
- 10) ただし comíai(s), cantaríai(s) のように -ía- という本来アクセントをもつ幹母音を含む活用形は問題の対象にならないので省く。
- 11) 数は少ないが, -ay という綴り字を持つ場合もある: estay (240), soy (314), hay (251, 252), cachay (318)。ただ, estay と soy の場合は1人称単数形(estoy, soy)に, hay の場合は3人称単数形に影響されたためとも考えられる。
- 12) caallero は資料の中で数回現われる。ここでは語の存在を示すことが目的なので, その中の一つだけを選んでページを記すことにする。以下同様。
- 13) ボブラシオンの中では住民の啓蒙を目指してさまざまなパンフレットが発行されている。栄養素の説明, 兎の飼い方, 野菜の作り方, といった食料問題を扱ったものから, 民衆組織の作り方, その意義, リーダーのあり方, 自己資金の作り方等を扱ったものもある。資料体参照。
- 14) 語彙に関しては Morales, F. P. らの手になる4巻のチレニスモの辞書が1984年に出版されている。

## 資料体

演劇のシナリオ

Muñoz, D. et. al. 1987. *El teatro poblacional chileno: 1978-1985*. Minneapolis: The Prisma Institute.

ICTUS y Benavente, D. 1989. *Pedro, Juan y Diego / Tres Marías y una Rosa*.

高橋節子

Santiago : Chile América CESOC.

ポブラシオンで発行されたパンフレット

El patio de nuestra casa : un espacio para cultivar, TAC, 1984.

¿Cómo y cuándo participamos ?, TAC, s. f.

Autofinanciamiento, TAC, s. f.

¿Qué es la nutrición?, TAC, s. f.

Evaluar y programar, TAC, s. f.

¿Qué es una organización social y popular ?, TAC, s. f.

Los dirigentes ¿cual preferimos ?, TAC, s. f.

Avanzando, TAC, 1985

Crianza de conejos, TAC, s. f.

La voz de las ollas, TAC, 1990.

### 参考文献

瓜谷良平 1965 「米州スペイン語に於ける“VOSEO”について」『拓殖大学論集』46, 419-442。

堀田英夫 1976 「VOSEO と TUTEO」『HISPANICA』20, 52-68,

里見実 1990 『ラテンアメリカの新しい伝統』晶文社

Canfield, D. L. 1962. *La pronunciación del español en América*, Bogotá.

———. 1981. *Spanish Pronunciation in the Americas*, The University of Chicago Press.

Cotton, E. G. and Sharp, J. M. 1988. *Spanish in the Americas*, Georgetown University Press.

Kany, C. E. 1951. *American-Spanish Syntax*, The University of Chicago Press.

Morales, F. P. et. al. 1984. *Diccionario ejemplificado de chilenismos*. Academia Superior de Ciencias Pedagógicas de Valparaíso.

Muñoz, D. et. al. 1987. *El teatro poblacional chileno : 1978-1985*. Minneapolis : The Prisma Institute.

Moreno de Alba, J. G. 1988. *El español en América*, Fondo de cultura económica.

Navarro Tomás, T. 1972. *Manual de pronunciación española*, C.S.I.C.

Oroz, R. 1964. El español de Chile. *Presente y futuro de la lengua española*, I : 93-109. Madrid : OFINES.

———. 1966. *La lengua castellana en Chile*. Santiago : Universidad de Chile.